

憐れんでください

受難節第5主日を迎えました。本日はこの年度最後の主日礼拝となります。そして新型コロナウイルス感染症が始まった2020年から3年をへて、次年度からはウィズコロナからアフターコロナへと、社会は動き出そうとしています。この期間に9名の教会員を天に送りました。なかには感染の危険を考慮したご家族の意向で教会でお別れのかなわなかった方も3名おられます。それほど事態が、100年ぶりのパンデミックの試練が与えられました。本当にどうなるかと思いましたが、神の憐れみと導きによって一度も礼拝・聖餐式を休止することなく、対面での礼拝を守り続けることが許されたのは感謝なことでした。この死の陰の谷を歩んだ3年あまりのあいだ、あらためて教会とは何か、礼拝とはわたしにとって何か、教会の兄弟姉妹との交わりの意味を、それぞれの方が問われたことと思います。わたくし自身が、つねにその問いの前に身をおいて、祈り、いま取り次がねばならない御言葉を求めて歩んだ3年間でした。そして共に御言葉に養われ、持ち運ばれたことを感謝を持って告白することが許された恵みを覚えています。

さて、そんなこのコロナ下の3年を総括するような思いの与えられた年度最後の礼拝の聖書箇所として、今朝は旧約と新約から、ふたつの御言葉が与えられています。旧約聖書の預言書であるホセア書とマタイによる福音書からです。「マタイを弟子にする」という小見出しが新共同訳聖書についておりますように、これは弟子の召命の記事ですが、お気づきになられたと思いますが、ひとつの御言葉が共通しています。

わたしが求めるのは憐れみであって いけにえではなく
神を知ることであって 焼き尽くす献げ物ではない

今朝は、神の憐れみということに焦点をしばって御言葉に聴いてゆきたいと願っております。

この御言葉から分かることは、わたしたちの神は憐れみ深いということ。そして、どういう意味か、言って学びなさいとイエス様に言わせてしまっているのですから、わたしたちは憐れみ深くないということですね。そして、神はそのようなわたしたちが憐れみ深くあることを願っておられる。またいけにえや焼き尽くすささげ物よりも、神を知ること、とあるように、憐れみ深い神を経験することを願っておられる、そう言って良いでしょう。

まず起きた出来事の確認ですが、9章に入って、主イエスは中風で苦しむ男が担架にのせて連れてこられたのを癒やされたのち、通りかかった町の収税所に座っていたマタイに「わたしに従いなさい」と声をかけられる。マタイは立ち上がってイエスに従い、彼の家で食事が始まり、そこに多くの徴税人や町で罪人とされる人々が集まって食卓を囲んだわけです。そこにクレームがはいった。ファリサイ派の人々が、同席していたイエスの弟子に「なぜあなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。それに対するイエス様のお答えが「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。「わたしが求めるのは憐れみであって いけにえではなく 神を知ることであって 焼き尽くす献げ物ではない」とは、どういう意味か、行って学びなさい、と語り、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と宣言をなさった。じつは9章最初の中風の人の癒やしの箇所でも、イエス様は病を癒やすよりも「あなたの罪は赦された」と声をかけて、そのことが問題を引き起こしていますので、あわせてご自分の働きの意味を「罪人を招かれる主」であることを示されたと言って良い。それこそが神の国の到来であることを示された。そしてその中心に置かれているのが、「わたしが求めるのは憐れみであって いけにえではなく 神

を知ることであって「焼き尽くす献げ物ではない」という御言葉なのです。福音書記者マタイは、あのホセア書の預言は、この方、イエス・キリストにおいて実現したのだということをプレゼンテーションしているのです。神の憐れみと慈しみは、キリスト・イエスにおいて新しく書き換えられたバージョンアップしたということでしょうか。わたしたちのために苦しみ、涙を流し、喜び、共に働かれるイエス・キリスト。存在そのものが憐れみである方が、救い主として、わたしの下に来てくださるということが喜びなのです。この喜びの出来事の中で、わたしたちの生き方が変わる信仰の恵みが明らかにされます。それは神に従う生活の始まり、神の恵みの御支配の中に自分を位置付けていく生活の始まりです。むしろ新しい人間の創造とも言うべき事柄です。マタイの存在そのものが新しい時代の救いのメッセージとなるのです。ここに証の大切さも示されています。徴税人のマタイが主に従い、彼の家が喜びの場となり、仲間の徴税人たちが食卓の席につく。これはひとつのしるしであり、ムーブメント。それに敏感に反応する人たちがいます。日本の諺でいえば「出る杭は打たれる」であったり、「雉も鳴かずに撃たれまい」という状況です。しかし、主イエスは神の国を告げに来られた。その到来が新しい出来事の始まりを告げている。それは質的な違いを伴うものであることが、ここではっきりと示されます。それは罪人が糾弾され、排斥されるのではなく、神が罪人を招かれる主であることを示す。画期的な出来事。その意味で、イエスさまがここで北王国イスラエル時代に活躍した預言者ホセアの言葉を引かれたのは実に適切なことでした。「わたしが求めるのは憐れみであっていけにえではなく 神を知ることであって、焼き尽くす献げ物ではない」、そうイエスさまは徴税人マタイの家で、多くの徴税人仲間や罪人と食卓につかれた主イエスをみて「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人たちと一緒に食事をするのか」と責めた

ファリサイ派の律法学者たちに向かって「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人であると断って、ホセアの言葉を引用し、わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と宣言するのです。ここに神の御言葉が成就しています。新しい出来事が始まっています。大きな方向転換が始まっているのです。神さまの御業として、罪人が招かれ、その罪がゆるされ、あらたに神に従って歩む者とされる時代が訪れた。名誉回復などという言葉では足りない。死んでいたのに生き返ったというレベルの出来事が起きているのです。ですから多くの徴税人や、罪人とされる人々が、マタイの出来事をつてに、主イエスの周りに集まって来たのです。新しい人間への憧れをもって集まってきたのです。そして主イエスの食卓の客人となったのです。主イエスは、御自分に従う者の家を、交わりの場、祈りの場、癒しの場として用いられました。主イエスは救われた者を用いて働かれます。マタイの家で開かれた食事には彼と同じ仕事をしていた徴税人が、そして罪人と呼ばれた人たちが、主イエスや弟子たちと共にたくさん席に着いていました。当時の社会における罪人は、わたしたちのイメージする犯罪人ではありません。むしろそういう人もいたかもしれませんが、圧倒的多数は職業上、つまり生きるために選択しなけりなかつた仕事によって、律法を守ることが出来なくなつた人々でした。当時のファリサイ派のリストによれば、罪人とは、異邦人であるローマ帝国の手先になつて、税金の徴集を請け負う徴税人、そのほかに犯罪者、売春婦、乞食、船乗り、羊飼ひ、肉屋、下級労働者、異邦人などが、分類されていました。職業的に、律法に触りそうな人々は、律法学者や、ファリサイ派の人々によって、軽蔑の対象になつていたのです。それらの人々が、主イエスの下にやつて来た。主イエスの中に、その語ることと、為すこと

と、人格の中に、彼らはまったく新しいものを見た。彼らの社会にはないものを見た。それは途方もなくおおきな神の憐れみでした。だからみんなやって来た。その教えを聞きに、その業に触れに、主イエスのうちから溢れ出すこの憐れみに少しでも触れたいとやって来たのです。慰めと交わりを求めてやって来たのです。罪人に必要なのは受け入れられることです。これは勿論、すべての人間が必要としていることですが、それを正に飢えたように、渴いたように求めているのは、自分たちのアイデンティティを剥奪されている人々です。その社会で正当なものでないと烙印をおされた人々、はみ出してしまった人々、罪を犯した人々が、誰よりも理解され、受け入れられ、愛されることを求めている。自分の存在を受け入れてもらうことで初めて、わたしたちは自分が何者であるかを理解することが出来る。みずからの人生の意味と目的を考えることが出来る。しかし、わたしたちはそのかたわらにずっと立ち続けることが出来るほどに愛に満ちた存在ではありません。罪が大きければ大きいほど、わたしたちの愛は冷えてゆきます。自分の正しさを口にして、わたしは彼らとは違うと線を引こうとします。彼らは、この社会では価値がなく、無意味で、透明な存在です。人間扱いされていません。しかし、主イエスは憐れみをもって、その人そのものを見、理解し、受け入れたのです。ご自分を罪びとの友と限定をされたのです。そのことで、主イエスの語ること、なすこと、人格において、まったく新しい秩序が始まっています。これを聖書は、神の国と呼びます。神様の恵みのご支配です。そこでは罪人が、その犯したことゆえにしりぞけられることはありません。罪は裁かれますが、その人そのものが切捨てられることはありません。うとまれ、憎まれていた人が招かれ、主イエスと向き合い、食卓につき、その苦しみを理解してくれ

る人、存在の渇きを癒してくれる人と出会った。主イエスに受け入れられて、理解されて、彼らは重荷を下ろすことが出来たのです。一息をつき、神に愛されている者として、自分を再発見することが出来たのです。それが食卓の交わりが発信していたメッセージでした。ファリサイ派の人々に言わせれば、罪人と一緒に食事をするなど考えられない。食卓を共にするということは、心を同じくする者たちの深い交わりのしるしです、一緒にいれば彼らと同類ということに当然なります。ですから、「どうして彼は徴税人や罪人といっしょに食事をするのか」と聞くのです。素朴な疑問もあったでしょうが、半分はあなたたちも汚れてしまうぞと弟子たちに言いたいのです。罪人と平気で一緒にいるような男を先生として大丈夫かと弟子たちに言っているのです。彼らは自分の正しさしか見えませんでした。その正しさが自分をも他人をも裁く剣となっています。彼らの真面目さをわたしは疑いませんが、この生き方には平安や和らぎ、喜びはないのです。ファリサイとは「分離」という意味です。人を貶めることで自分を高い位置に押し上げる。主イエスはファリサイ派のように自分が高くなることによってではなく、自分を低くすることによって、ご自身を与えることによって失われた交わりを回復してゆきます。主イエスは、ファリサイ派の律法学者の批判を受けて、「医者が必要とするのは丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と答えました。このお言葉は、実際に主イエスがしていたことを分かりやすく言葉にしたものだと言えます。それは収税所に座っている男を弟子として召しだされた出来事であり、また頻繁に繰り返される徴税人や罪人と目されていた人々との

食事でした。これはタブーだったのです。しかし、だとすれば、ここに滅ぶべき罪人たちを招かれて食事を共にして下さる方が来られたことは、まことに大きな方向転換だと言わなければなりません。罪人を遠ざけ、滅びに任すのではなく、罪人と共にいることを良しとし、探し出し、救われる方。この方が、わたしたちのキリストです。誤解のないように申し添えますが、無論、主イエスは罪を犯すことを良しとしているのではありません。徴税人の場合で言えば、不正な取り立てや、無慈悲な徴収の仕方が肯定されているのではありません。しかし、そのことのゆえに救いへの道を閉ざすことをしないのです。「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」というファリサイ派の律法学者たちの質問に答えて、主イエスが言われたように、医者が必要とするのは丈夫な人、健康な人ではなくて、病人だからです。正しいことをなしえない病的な状態にあるからと言って、病人を嫌う医者がいるでしょうか。患者から遠ざかって治療をしない医者があるでしょうか。また患者が滅びることを願って診察する医者があるでしょうか。医者は病人を癒すためにいるのです。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人をまねくためであると主イエスが言われたのも、そういうことです。主イエスは罪人がひとりでも滅びることを望んでおられない、「神はその独り子を賜ったほどにこの世を愛してくださいました。それは御子を信じるものが一人も滅びないで永遠の命を得るためである」と聖書に記されている通りです。神はわたしたちを愛しておられる。そのことが、この食卓で実現している。これは御国のかたどりで、神なき者が、神の御業によって、救われている。たとえ徴税人たちの行動が正しくなくても、それゆえ彼らが排除され、滅びてしまってもよいということではない。失われたままでよいということではない。そうで

はなく聖書が告げていることは、こうした人にこそ神の助けが必要なのであり、まさにそのために主イエスは来られたのだということです。このことをわたしたちは覚えて、主イエスに従って歩む者でありたいのです。ファリサイ派の律法学者たちのように、自分の考えた正しさにしがみつき、自らの救いのために他者を交わりから締め出すことによって自分の正しさを示す自己満足から自由にされたいのです。罪を赦す権威を持つ神の子が、そのお言葉通りに、まっさきに罪人の処に向かわれ、マタイを新しい存在に造り替え、彼の家食卓を、罪びとを招く教会とし、そこに留まることを良しとされたのです。いや、自分が来たのは、まさにそのためであると「罪人を招くためにこそ、わたしは来たのだ」という宣言を、ここでファリサイ派の人々に向かってしたのです。非常に判りやすい神の国のマニフェストであり、公約であり、事実、その神の御心を生き抜かれたのです。神さまの御心はこのように主イエスの御生涯によって明らかにされました。そこにはわたしたちに対する憐れみと慈しみが溢れています。神の真実が明らかにされています。そして、この神の愛から洩れる者は一人もいないのです。主イエスが明らかにされたのは、すべての人は恵みによって救われるということです。これが福音です。救いはいつもわたしたちの業ではなくて、神業です。だから福音と呼ばれるのです。福音を信じることは、何か教理や、信条を暗記することではなくて、イエス・キリストに依り頼むことです。それは血の通わない規則ではなくて、聖書の中に記されているように、神の憐れみと慈しみを体現されたキリスト・イエスと出会って、そこにあなたが身をなげる、委ねる。そういう体験を積み重ね、この方を救い主と信じて、立ち上がり、従う歩みへとマタイのように生き方を変えることです。

わたしが求めるのは憐れみであって いけにえではなく
神を知ることであって 焼き尽くす献げ物ではない

わたしたちは、神の独り子イエス・キリストの恵みを知ることによって、神が憐れみ深い方である真実を確認します。そして、そこに身を向け、身を投げ、献身して生きる道が神が喜ばれるいけにえであることを聖書は告げています。いま、わたしたちは受難節の日々を歩んでいます。罪人を招くために来られた主が、わたしの救いのために十字架にかかれ、贖いの御業を完成され、わたしを、罪と死の支配から、神の恵みのご支配のうちに引き取って下さった。わたしたちはこの神の憐れみの御業へ招かれています。そして、この方の赦しの愛が、自分の人生を覆っているという神の真実を信じて、自分の歩みをそこに重ね併せて行くのです。そこで初めて、わたしたちの人生の目的は、主のものとされたことを喜んで生きることであるが判ります。苦しみがなくなる訳ではありません。しかし主が共におられ、道を示し、働かれるのですから、人生の問題はすべて御手の中に置かれ、御顔の光の中で捉えることがゆるされています。その時、わたしたちは意味のない不安や、恐れから解放されています。神が味方であり、わたしの贖い主であることを知るにまさって心強いことはないからです。マタイの家の食卓は賑やかでした。救い主がおられることによる神の平和が支配していたからです。神に見出された喜び、救いが自分のものとなった喜び、この方を主と仰いでいける喜び、その喜びに水を差すようなファリサイ派の発言は「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく罪人を招くためである」という主イエスの宣言によって粉碎されます。あなたを捉えることがわたしの来た目的である。あなたを御国の世継ぎとし、主を信じる者として新しく生かすことがわたしの願

いであり、父の喜びである。そう主イエスはおっしゃっておられます。この宣言はわたしたちから、決して取り去られることも、撤回されることもないのです。永遠の決定なのです。この消息に生きるように招かれたのがわたしたちの教会です。主の恵みの招きに応じて、この憐れみの福音に委ねて、わたしたちの歩みを整えたいと願います。

お祈りいたします。